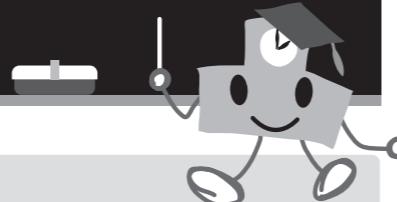


小学校の事例 西 区 手稲東小学校

身近な川での学習で 自発的な環境づくり。

発達段階に応じ、自由な遊びからテーマをもった観察、そしてポスターセッションへ。実際に川の中に入ることで、様々な生き物の存在に気付き、観察意欲が生まれる。川への興味と理解が学年を追うごとに深まり、「きれいに保ちたい」という環境保護の意識が育まれる取組。



内容 地域の川を学習の素材に

「身近なもの、実感できるものを素材に」と考え、本校の1年生～3年生は夏場に生活科や総合的な学習の時間を活用して、地域（徒歩で約15分）にある川に行き、実際に中に入つての学習を欠かさずしている。何年も続いている学習活動である。

1年生

初めは遊びを重視。次に「環境・生物・植物」といった理科的な要素を取り入れ、川の隣にある沼地へ。たとえば水たまりから泡（洗剤が流れたことが予想される）が立っているようすから、「きれいな場所ではない」という予想を立てたり疑問をもったりしながら観察する。さらに、自分たちに何ができるかを考え、一步踏み出すことをねらいとしている。

2年生

魚や水中の虫を積極的に探して、観察をする。初めはなかなか発見できずにいる子供たちも、回数を重ねるごとにこつをつかみ、自分たちで準備したザルや網、観察メガネなどを使って様々な生き物を観察している。観察後は観察カードに絵などを記入。観察できる生き物は、ウグイやヤマメ、カニ、カワニナなどに加え、タニシやヤゴなどの水棲昆虫も多い。トゲウオのような小さな魚を教室に持ち帰り、鰓節などで餌付ける。約1週間飼育した。

3年生

1～2年生で関わっていた自由な遊びの枠を越え、一人一人テーマをもって観察活動をする。テーマは、場所による水の流れや速さ、カワニナの数の違いなど。観察後は模造紙に個人もしくはグループでまとめ、クラスでポスターセッション形式の発表を行った。



川の学習のようす①

4年生・5年生・6年生

4年生以上については川に入ることはしないが、川の水が水道水用に取り込まれていく現場の見学（4年生）や浄水場に行って、ろ過の学習（5年生）など、川に関わる学習をしている。また、4年生以上が参加するクラブ活動の中には「釣りクラブ」があり、夏場には金曜日の放課後、川で活動をして、自然に触れている。

効果 現場を見て自覚 川を守るために自発的な行動が生まれる

川そのものへの興味と理解が、学年を追うごとに深まっているのが感じられる。たとえば、本校で題材としている川と近隣の川との違いを調べたいということで、透明度などを調べて来た子どももいた。また、様々な生き物が川の中に存在するということ、川のすぐそばの沼地が予想以上に汚れていたりすることを発見することで、きれいに保つ意識が生まれ、自発的にごみ拾いに取組むようになった。



川の学習のようす②

注意点 地域に見守られながら 安全第一で

活動にあたっては、雨の日の翌日や、水量や川の流れに危険性がある日は実施しないなど、安全第一に気を遣っている。また、ガラス片が落ちていたりすることもあるので、裸足にはならないようにしている。観察を行っていると、遊歩道を歩く地域の方が「気をつけてね」など、温かく声かけをしてくださることも多く、見守られているということを感じられ、安心感をもって活動ができている。



川の学習のようす③



環境教育を進めるにあたっては、身近なもの、子どもにできること、さらに体験と実感が伴うものが望ましいと考えています。身構えてやるのではなく、あくまで自然に、当たり前のようにできることが理想です。しかし何かを始める際や調べる際に、「身近にある」インターネットをすぐに開いて、それで理解したように感じてしまうのは、疑問に思われるところであり、特に自然環境については、他人事でなく自分につながり関わっていることの意識をもてるようになることが大切です。

子供たちに返ってくるものが、たとえ「目安」としてでもあることが望ましいので、今後設置予定のソーラー発電パネル、特にそのモニター（現在の発電量がわかるもの）はとてもよい題材になるので、飾り物にせず、大いに活用していきたいと考えています。